

初年次教育における学びの転換 とアクティブラーニングの導入

Mending Student's Ways of Learning and Introduction of Active Learning in First Year Education

鳩貝 耕一
Koichi Hatogai

甲南大学 教育学習支援センター
神戸市東灘区岡本 8-9-1, 658-8501
Learning Utility Center for Konan University Students (LUCKS),
Konan University
8-9-1 Okamoto, Higashinada, Kobe, 658-8501

概要

文部科学省の中央教育審議会が 2012 年に出した「大学教育の質的転換」を問う答申では、大学の規模にかかわらず教育プログラムを再構築するようになっている。この論文では、高等教育の質的転換について、いくつかの側面から現況を俯瞰する。文部科学省や河合塾の調査をもとに大学教育の質的転換を図るための取り組みについて考えると、初年次教育における「学びの転換」が一つの解となろう。学びの転換を実現するには、通常の講義ではなくアクティブラーニングの導入が不可欠である。アクティブラーニングとしてグループディスカッションを導入した場合、議論が不活性なグループのそれを活性化し促進するには、ファシリテーターの存在が不可欠となる。そのためには、学生スタッフを育成して組織し、教員のもとで学習支援を行うことが必要となろう。

Abstract

The report questioning on the “qualitative changeover of university education” submitted in 2012 by the Central Council for Education of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) prompts us to rebuild the university education program regardless of the scale. In this paper, the recent situation of higher education with a qualitative changeover is overlooked from several aspects. Based on the investigations of the MEXT and of Kawai-juku, “mending student’s ways of learning” in the first year education would be one of the solutions to achieving a qualitative changeover of university education. In order to turn the solution into reality, introduction of active learning instead of the usual lecture is necessary. If a group discussion is introduced as the active learning, presence of a facilitator is essential for promoting and activating it in an inactive group. It would become necessary to assist students under a teacher by nurturing and organizing an upper-class student staff.

キーワード: 学びの転換, 学習支援, アクティブラーニング, 質的転換

1. はじめに

アクティブラーニング型授業の導入は、大学教育界での喫緊の課題となっている。以前は、いくつかの私立大学における教育の先進的な取り組みのうちの一つと見なされていたものである。ところが、文部科学省中央教育審議会から 2012 年 8 月に出た答申、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」[1]の中で「アクティブラーニング」というキーワードが初めて明文化されたことにより、これ以降、国公立を含む全国の多くの大学が取り組むことになった。

この答申では、生涯学び続け主体的に考える力を持つ学生を育成するプログラムとしての「学士課程教育」の構築など、一連の教育改革を全学的なマネジメントのもとに行わねばならないと提言している。また、「どんな環境においても『答のない問題』に最善策を導くことができる」能力 (competence) を育成することが重要であるとも説いている。

この能力は、従来、企業が大学の卒業生を受け入れた後、新入社員教育や OJT (On the Job Training) の中で鍛えていたものである。この答申の背景の一つとして、新入社員の価値観が多様化した現在、企業の中での教育や研修だけではこういった能力の育成に対応していくことが難しくなってきたという事実が挙げられる。そのため、大学在学中の 4 年間での上記のような能力の育成が期待されているわけである。

学生の能力育成の中で直面せざるを得ないのは、高等教育において最低限必要とされる学力レベルに満たない学生の存在である。能力育成のためのカリキュラムを組む以前の問題として、この課題をどのようにクリアするのが高等教育機関に問われている。その解決策として、初年次教育の充実や学生の学習への支援などが挙げられる。

学生支援の考え方は、戦後、新制大学発足時に米国より持ち込まれた「学生助育」にまでさかのぼることができる[2]。しばらくして、1970 年代より立命館大学が授業や学生生活の支援のためにピアサポーターを導入したり、あるいは慶応義塾大学が 1990 年に開設した湘南藤沢キャンパスにおいて、図書館と情報システムを融合したメディアセンターに学生サポーターを導入したり、現在ではアクティブラーニングと評価できる授業を行ったりしている。

その後、いくつかの公立や私立大学において教育や学習サポートに関する新しい取り組みが行われた。国立大学の取り組みとしては、廣中平祐氏が山口大学学長時代の 2000 年に作成した、いわゆる「廣中レポート」[3]が学生サポートのベースとなっている。

以下では、まず上記答申について概観し、次に初年次教育における「学びの転換」の実態についてまとめる。本来ならば、大学全体の組織的な取り組みやキャリア教育などを含む出口保証の現状についても言及すべきところではあるが、ここでは初年次教育を中心にまとめていく。続いて、アクティブラーニングのための学習支援の状況についてまとめる。

2. 「質的転換」答申の概要

冒頭に述べた、2012 年に中教審が出した答申では、学士課程教育の質的転換への方策として体系的・組織的な教育の実施を挙げ、学生の学修時間の実質的な増加と確保についての方策として以下のものを挙げている。

- 教育課程の体系化
大学、学部、学科の教育課程が、全体として学生のどのような能力を育成し、どのような知識、技術、技能を修得させようとしているかについて、教育課程の構造を分かりやすく明示。
- 組織的な教育の実施
体系的な教育課程に基づき、教員全体の主体的な参画による教育課程の体系化、および授業内容とその実施に関する組織的な取り組みが必要。
- 授業計画（シラバス）の充実
シラバスは、授業のため学生が主体的に事前の準備や事後の展開などを行うことを可能にし、他の授業科目との関連性の説明などの記述を含み、授業の工程表として機能するように作成。

- 全学的な教学マネジメントの確立

教育力の向上を含む諸課題を発見し解決を進めるため、学長のリーダーシップの下、全学的な教学マネジメントを確立し、大学教育の改革サイクルを展開。

次に、質的転換に向けた更なる課題として以下のものを挙げている。

- 大学による改革努力と課題

学士課程教育の質的転換に熱心に取り組んでいる教員や職員の意欲を阻喪させることなく、教育の質的転換のための改革サイクルが持続的に機能するようにするためには、学士課程教育をめぐる問題の背景や原因を分析した上で、大学や社会全体で有効な対策を講じることが必要。

- 「プログラムとしての学士課程教育」という概念の未定着

学生に求められる能力をどのようなプログラムで育成するのか（学位授与の方針）を明示し、その方針に従ったプログラム全体の中で、個々の授業科目は能力育成のどの部分を担うのかを担当教員が認識し、他の授業科目と連携し関連し合いながら組織的に教育を展開すること、その成果をプログラム共通の考え方や尺度（アセスメント・ポリシー）に則って評価し、その結果をプログラムの改善・進化につなげるという改革サイクルを全学的な教学マネジメントの中で実際に機能させるとともに、学位授与の方針に基づき教員が組織的な教育に参画しこれに貢献し、プログラム自体の評価を行うという一貫性・体系性の確立が重要。

- 学修支援環境の整備についての課題

主体的な学修の確立の観点から、学生の学修を支える環境の更なる整備が必要。学生が平日はアルバイト等を行うことなく学修に専念できる環境を整備すべき。

- 高等教育と初等中等教育の接続についての課題

大学における主体的な学修は、初等中等教育段階での基本的な知識・技能の着実な習得をベースに、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力を養うことや、学修意欲、倫理的、社会的能力が基盤として形成されてこそ成立する。高等学校教育と大学教育が連携・協力しながら、両者の学びの質を高めることが必要。

- 地域社会や企業など、社会と大学の接続についての課題

授業に出席せずに就職活動をしていても卒業できる大学の現状や、就職面接等で企業から卒業論文の内容等についてほとんど聞かれたことがなく、大学での学修が社会で活きるという意識が芽生えないなど、学修と就職活動の相克は喫緊の課題として企業側の理解を得て解決されなければならない。大学生の主体的な学修の確立や学修への動機付けという観点から、地域社会や企業と大学や大学コンソーシアム等が新しい連携・協力関係を構築することが重要。

繰り返しにはなるが、高大接続を含む入口における課題、卒業し社会人になったあとの出口における課題などを考慮し、全学的なマネジメントのもと主体的に考える力を持つ学生を育成する学士課程教育を構築するとともに、これら一連の教育改革を継続することが必要としている。

なお、中教審は答申の中で「学修」という言葉を定義し使用しているが、これと「学習」の概念との違いに関し、京都大学の溝上慎一氏が講演の中で緻密な考察を行っている[4]。一言で表すのは問題かもしれないが、「学修」とは正課教育の中での学習、すなわち単位を修めるための学習のことである。生涯学び続け主体的に考える力を養うのであれば、その範囲を超えて広く「学習」する活力が学生には求められる。言い換えれば、授業をきっかけとして学問への興味が沸き、さらにその先を自主的に学習していく態度が身につくことを期待して学習を支援していく必要があるものと考えられる。

3. 初年次教育における「学びの転換」

学士課程教育の質的転換に向けては様々な方策が考えられるが、初年次学生に「学びの転換」をうながすことが最初の一步として重要である。たとえば、Future Skills Project 研究会[5]では初年次前期に産学連携のFSP講座を開催し、学生の学びの転換を促している。

文献6の第1章第2節「初年次教育からみた『学びの転換』」（国立教育政策研究所 川島啓二）によると、「転換された学び」を以下のように定義している。

- 自ら主体的に学ぶ、つまり自律的である
- 問題発見・問題解決型思考を持っている
- (職業的、社会的な) レリバンズが内在化されている

また同研究所は、2007 年 12 月に「大学における初年次教育の現状」調査を全国の国公立大学の全学部長に対し行っている(1980 学部配布し、1419 学部より回答があった)。初年次教育を通じて学生が修得する「ことがら」についての重要度順に以下のような結果となっている。

1. レポート・論文の書き方などの文章作法
2. コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術
3. 自立した自己学習の基礎
4. 図書館の利用、文献検索の方法
5. 学生生活における時間管理や学習習慣の確立
6. 論理的思考力や問題発見・解決能力
7. 学問や大学教育全般に対する動機づけ
8. プレゼンテーションやディスカッションなど口頭発表の技法
9. 受講態度や礼儀・マナー
10. 情報収集や資料整理の方法とノートの取り方

上記の順位より、いわゆる「読み書き算盤」として表されるリテラシーに関する能力の向上に加え、学びの転換に関連する項目が上位を占めていることがわかる。各大学のスタッフが学びの転換の必要性について認識している結果であると見なすことができる。

大学への入学が学びの転換点であることを認識させるには、知識を伝達するだけの講義科目では不十分であり、何らかのアクティブラーニングを取り入れた授業を用意する必要がある。河合塾が 2012 年度に行った「大学のアクティブラーニング調査」[7, 8] (2231 学科に送付し、962 学科より回答があった) では、「初年次ゼミ科目に含まれるアクティブラーニングの形態」として学系ごとに以下のような頻度となっている(頻度大=3, 頻度中=2, 頻度小=1, 記載なし=0, の平均値)。

系統	対象 科目数	グループ 学習	ディベート	フィールド ワーク	プレゼン テーション	振り返り	時間外 学習
文・人文・外国語学系	377	1.7	1.2	0.7	1.8	1.5	1.8
社会・国際学系	203	2.1	1.6	1.2	2.0	1.7	1.8
法・政治学系	134	1.9	1.5	0.8	1.9	1.5	1.6
経済学系	112	1.8	1.3	0.8	1.8	1.6	1.6
経営・商学系	246	1.9	1.2	0.8	1.8	1.5	1.6
教育・教員養成系	47	2.0	1.2	1.2	1.6	1.6	1.4
理学系	126	1.8	1.2	0.8	1.8	1.8	1.7
工学系(建築学系を除く)	452	1.9	1.2	1.1	1.4	1.4	1.5
建築学系	101	1.8	1.0	1.3	1.5	1.3	1.4
生物生産・応用生命学系	57	2.2	1.4	1.4	1.5	1.4	1.6
総合・環境・人間・情報学系	164	1.9	1.3	1.1	1.9	1.4	1.5
全体	2019	1.9	1.3	1.0	1.7	1.5	1.6

ほとんどの系統でグループ学習とプレゼンテーションのポイントが高く、河合塾ではアクティブラーニングの導入が進んでいるものと見ています。学びの転換が必要な初年次ゼミにおいては、グループワークで議論した結論に基づきプレゼンテーションする授業形態が定着しつつあることを示している。

4. アクティブラーニングのための学習支援の状況

次ページの表は、文部科学省が「大学における教育内容等の改革状況について」と題して行っている 2011 年度から 2013 年度までのアンケート調査の集計結果[9]より一部を取り出したものである。「回答数」の左側は全回答数、右側はその数から大学院大学など学部を持っていない大学を除いたものである。

			TA の配置				ラーニング・コモンズの整備・活用				能動的学習を効果的にカリキュラムに組み込むための検討				教養教育を実施するための全学的な組織を設置する大学			
年度	回答数		国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計
2011	758	736	82	51	322	455	55	20	182	257								
2012	766	743	82	51	349	482	65	28	228	321	61	45	301	407	72	44	350	466
2013	762	738	83	49	352	484	77	40	272	389	62	43	349	454	74	46	359	479

ティーチングアシスタント（TA）を配置している大学は年度ごとに増加し、2013 年度では全体の 65.6%に達している。TA がどのような仕事をしているのかについては触れられていないが、2007 年度の結果から推測すると「実験・実習・実技指導」の割合が多いものと考えられる。

ラーニング・コモンズの整備に関しても、年率 2 割以上の割合で増加しており、その多くは私立大学が設置したものである。2013 年度には全体の 52.7%にまで達している。

能動的学習（アクティブラーニングの一般的な日本語訳）の導入を検討している大学も年々増えつつあり、2013 年度では 61.5%に達している。

初年次教育において中心的な役割を果たすとみなされる教養教育を実施する全学組織の設置も微増ではあるが増えつつあり、2013 年度では 64.9%となっている。

次の表は、河合塾が 2012 年度に行った「大学のアクティブラーニング調査」[7, 8]（2231 学科に送付し、962 学科より回答があった）のうち、「初年次ゼミ科目でのファシリテーターとしての SA・TA 導入状況」の結果を学系ごとにまとめている。

ファシリテーターとしてのスチューデントアシスタント（SA）やティーチングアシスタント（TA）の導入により、教員一人のみがファシリテーターとして多くのグループに関わるよりも、より多くのグループディスカッションを活性化することができる。参加する SA や TA への教育効果も無視することができない。

系統	対象科目数	無回答	導入していない	一部の講座で導入	全講座で導入	導入合計
文・人文・外国語学系	377	19%	62%	14%	5%	19%
社会・国際学系	203	20%	55%	15%	11%	26%
法・政治学系	134	15%	53%	26%	6%	32%
経済学系	112	9%	63%	21%	7%	28%
経営・商学系	246	12%	65%	13%	10%	23%
教育・教員養成系	47	21%	49%	19%	11%	30%
理学系	126	17%	33%	27%	23%	50%
工学系（建築学系を除く）	452	8%	38%	22%	31%	53%
建築学系	101	12%	43%	26%	20%	46%
生物生産・応用生命学系	57	28%	46%	18%	9%	27%
総合・環境・人間・情報学系	164	18%	46%	18%	18%	36%
全体	2019	15%	51%	19%	16%	35%

導入合計（筆者による一部講座および全講座への導入の合計）を見ると、文・人文・外国語学系、法・政治学系、経済学系では 2～3 割程度、理工学系では 5 割以上にのぼっている。理工系では、専門科目や実験でのアシスタントの活用が一般的であるためか、高い割合となっている。

SA や TA による教育効果を上げるためには、研修などの実施が不可欠である。このようなアシスタントの研修と運用が軌道に乗り、活用が効果を発揮すれば、教員の負担が大きく軽減されるものと考えられる。

5. まとめ

この論文では、高等教育におけるアクティブラーニングについて、いくつかの側面から現況を見てきた。文部科学省や河合塾の調査から見てくることが挙げると、大学教育の質的転換を図るために

は、その一つの取り組みとして初年次教育における「学びの転換」が不可欠なものと判断される。学びの転換を実現するには、通常の講義に加えアクティブラーニングを導入していく必要がある。

アクティブラーニングには様々な手段や手法が存在するが、その一つとしてグループディスカッションの結論をプレゼンテーションする授業形態が広まっている。議論が不活性なグループのディスカッションを活性化するには、ファシリテーターの存在が不可欠である。一般の授業では教員がその役目をはたすが、大人数になるとすべてのグループのファシリテーションを行うことが難しくなる。複数教員の協働による授業運営が難しい場合も多く、学生スタッフであるSAやTAを育成して組織し、学生を支援することも必要になってくる。

現在、本学では教育学習支援センターが立ち上がりつつあるが、ラーニングアシスタント（本学ではSAではなくLAと呼んでいる）の育成が重要な課題となっている。現在は、授業を担当する教員に候補者を挙げてもらっているが、将来的には一定数のアシスタントを常時確保できるような体制にもっていく必要がある。

アクティブラーニング型授業についても、運営方法や成績評価などについて、さらなる改良を加えていく必要がある。専門科目など2年次以降の授業については、授業の質を高めるための工夫[10, 11]を取り入れてみたり、成績評価についても従来のような提出物による評価ではなく、学生のパフォーマンスを評価[12]したりすることが、今後求められてくる。

参考文献

1. 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」、中央教育審議会、2012年8月。
2. 高石恭子、「現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援」、京都大学高等教育研究 第15号、京都大学高等教育研究開発推進センター、2009年12月。
3. 「大学における学生生活の充実方策について（報告）－学生の立場に立った大学づくりを目指して－」、文部科学省、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm, (2016年3月14日閲覧)。
4. 「2014年度 | 公益財団法人 大学コンソーシアム京都」、大学コンソーシアム京都、<http://www.consortium.or.jp/project/fd/forum/2014-1>, (2016年3月14日閲覧)。
5. 「一般社団法人 Future Skills Project 研究会（FSP 研究会）」、Future Skills Project 研究会、<http://www.benesse.co.jp/univ/fsp/>, (2016年3月14日閲覧)。
6. 東北大学高等教育開発推進センター編、「大学における『学びの転換』と学士課程教育の将来」、東北大学出版会、2010年3月。
7. 「河合塾グループ/大学の教育力を見る『大学のアクティブラーニング調査』プロジェクト/教育の研究・開発」、河合塾グループ、<http://www.kawaijuku.jp/research/activelearning/>, (2016年3月14日閲覧)。
8. 河合塾編、「『学び』の質を保証するアクティブラーニング」、東信堂、2014年5月。
9. 「Q5 日本の大学では、教育内容・方法等の改善がどれくらい進んでいるのでしょうか。：文部科学省」、文部科学省、http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/005.htm, (2016年3月14日閲覧)。
10. 溝上慎一、「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」、東信堂、2015年7月。
11. 松下佳代、「ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために」、勁草書房、2015年9月。
12. ダイアン・ハート、田中耕治監訳、「パフォーマンス評価入門 『真正の評価』論からの提案」、ミネルヴァ書房、2014年6月。